

研究報告資料

(1)

1. 日本海民族の音の輸入（他民族からの影響）流れ

時代（世紀）	日本の文化	日本海地域	西洋社会では
原始～奈良時代 （1～8世紀）	縄文～弥生文化 古墳～飛鳥文化 （新羅&百済の儀式 音楽が伝来→雅楽） 白鳳～天平文化	6世紀：インド古典 音楽～ラマ教音楽 の発生	アラビア地域とギ リシャ音楽の接点 発生
平安時代 （9～11世紀） 古今集、源氏物語	琵琶・箏の音楽が 伝来→催馬楽 声明、田楽 雅楽家の活躍	大陸音楽時代	多声音楽（ポリフォニ ー）
鎌倉～南北朝～室 町時代 （11～16世紀） 平家物語	田楽、猿楽、曲舞 平曲家 「花伝書」風姿花伝 （16世紀末）三味線の 伝来	民族音楽発生時代	1517 ルーテル宗教 改革 キリスト教音楽
安土桃山時代 （16～17世紀）	人形浄瑠璃 歌舞伎踊(1603)	民族音楽発生時代	
江戸時代 （17～19世紀） 1639～鎖国	歌舞伎（市川団十 郎は江戸、坂田藤 十郎は大阪） 義太夫	民族音楽の復興時 代	1685 ヘンデル、バ ッハ生 1732 ハイドン生 1756 モーツァルト生 1776 アメリカ独立 1770 ベートーベン生 （1804 英雄交響曲）
明治～ （19～20世紀） 西南の役		西洋音楽輸入時代	1862 ドビッシー生

研究報告資料

(2)

2. 民族楽器のルーツについて

日本海処地域の文化の一つが音楽である。地球上のすべての国に共通しているのはいかなる文化も風土環境と歴史環境をルーツに誕生し、民族性を守り、生活文化として必要度があり、守り伝承されてきたと考察できる。

(1) ページの年表を日本音楽歴史の時代立場で大きく整理する。

I. 古代 (6～10 世紀) 地域の音楽時代～アジア大陸音楽輸入時代

原始民族音楽が各国の支配体制(国土の領有が形成するまで民族闘争もあり)が確立するまでの時代について・・・音は保存できず現存しないが、埴輪などの考古学資料と歴史資料文献＝古事記、日本書紀、風土記にて歌詞の形式とリズム、旋律が確立したことが理解できる。原始楽器として「フエ＝石や土やがて竹で創作」、「ツツミ＝太鼓はインドのドゥンドゥビ、中国の鼓に似た原始的な楽器が埴輪文化に存在」、「コト＝埴輪から出土し、雅楽に使用されていた。五弦、六弦のワゴン」、「スズ＝木や土で製作されて民族舞踊者の手足につけて揺らした音を創作し、」世界の民族全般に音楽用また装身具にも利用されたと思われる。日本海地域の風土では比較的、長い音を表現されているのは現代用語の「さ・し・す・せ・そ、は・ひ・ふ・へ・ほ」の無声音に近い音の使い方が生まれた時代である。やがては朝鮮半島の三国＝新羅、百済、高句麗＝との交流から朝鮮音楽が大陸音楽として伝来された。インド(天竺てんじく)から中国～仏教文化として林邑楽(りんゆうがく)が伝来した。さらに8世紀には弦楽器(箏、琵琶)、管楽器(尺八、笙、横笛、篳篥ひちりき)、打楽器(腰鼓、太鼓、すり鼓)などが舞楽の資料とともに正倉院に残されてきた。

II. 民族音楽の時代 (11～19 世紀)

民族音楽の復興～大成の期間

律令政治以来、宮中儀式と神社儀式として大編成の礼式・儀式音楽として貴族文化に民族音楽は守られて伝承される時代となり、楽人の存在が認められ職業化してゆくようになった。中国、朝鮮から伝来した楽舞であるが、歴史変遷を経て風土や民族に合う音楽観が形成されて中世の音楽へ発展した時代である。大きな変化は民衆文化に貴族文化が融合されて伝承されたことである。仏教文化と共に「声明＝古代インドのサンスクリットと語を意味する」が伝来し平曲に取り入れられ琵琶法師の演奏が地方へ語り物音楽として伝えられた。白拍子(しらびょうし)という舞曲に乱拍子が音楽として取り入れられた時代でもある。やがて、能と狂言の文化に歌舞劇という「劇と音楽の調和」変革時代が観阿弥・世阿弥により音階も発声法とともに研究された。

近世(安土桃山～江戸時代末)は劇場音楽の発展時代となり箏や琵琶音楽、三味線音楽が木祖を確立できた。

(3)

Ⅲ. 西洋音楽の輸入時代 (20 世紀～)

明治維新から西洋化の変革は音楽以外のすべての文化様式を民族音楽から遠ざけた時代であるが「国際音楽時代」と考察できる。日本音楽研究の大家：田辺尚雄氏は朝鮮、中国、台湾、琉球、樺太の音楽の実地調査をして名曲の五線譜を発表し日本音楽の価値の再発見の功績は有名である。

3. 韓国 (大韓民国) 音楽調査から

I. 音楽鑑賞

国内にあるCDや映画鑑賞は西洋音楽と同様に、国際化された商業時代の音楽としてしか触れることができなくなりつつある。日本民族音楽研究会のメンバーは7人であるが予算の関係から今回は3人の音楽家：中山妙子 (箏)、桑原志音 (piano)、入江要介 (尺八) が韓国研究実地体験をし、創作音楽に参加し、現地コンサートを開催した。3月11日 15:00～光州芸術学校ホールにて韓国音楽を専攻する学生と日本音楽家の演奏会が開催された。国立音楽劇場で鑑賞できた楽曲は以下である。

- ★テグム散調＝民衆の哀歎を歌い、古代からの伝承された「シナウィ・パンソリ」の膨大な調子が伝来された曲
- ★ピリ正楽と大吹打＝竹に穴をあけた縦吹き小さな楽器で主旋律を担当し宮廷音楽に必須でピリ正楽という。
- ★鳳山タルチュム＝テグム (大琴) ソグム (小琴)、タンソ (短い箏) で演奏し美しい高音が韓国らしい。
- ★パンソリ＝物語をイメージした語り音楽。

II. コンサート

芸術学校の学生たちは将来ミュージカル専門家を目指しているので衣装も本格的。踊りも歌も4分の3拍子を基本に8分の6拍子～4分の4拍子へと乱拍子的な民族音楽であった。日本海民族研究の演奏家は昨年韓国音楽を研究し、さらに現地の風土に触れた感想を取り入れたオリジナル創作曲「風のソドム」をピアノと尺八で演奏し、好評であった。研究で一番の難関は「本海民族の21世紀の感性で創作する音楽づくり」である。演奏中の写真が撮れないのが残念でした。

Ⅲ. 日韓親善協会の役員3名が自費で動向されたお陰で大変、有意義な調査研究が継続可能になった事に心より感謝します。

Ⅳ. 現地の写真と演奏したオリジナル曲を添付。

Ⅴ. 各研究チームの「足で調査」＝図書館、博物館などに少ない資料しか無く、桐朋音楽大学、東京芸術大学の専門家、富山国際大学の韓国語教授、日韓親善協会の多大な支援に感謝して今後の調査を継続します。

研究報告資料 (写真と創作演奏資料)

Piano

風のSodom

桑原 志音
入江 要介

The musical score is written for piano in a 2/4 time signature. It consists of six systems of music, each with a treble and bass clef staff. The first system (measures 1-2) features a complex melodic line in the right hand with many beamed eighth notes and a simple accompaniment in the left hand. The second system (measures 3-5) continues the melodic development. The third system (measures 6-8) shows a change in the right-hand melody. The fourth system (measures 9-10) has a more rhythmic right-hand part with many rests. The fifth system (measures 11-12) continues this rhythmic pattern. The sixth system (measures 13-14) concludes the piece with a final melodic flourish in the right hand.

15

2 / 5
1 / 4

17

20

23

Fm7 | G | Em7 | Am |

Dm7 | Gsus⁷ | G7 |

Fm7 | Am | Cmaj^{perfect} 4 | Dm | Fm G7 | Em7 Am | Dm G | A |

C9 | Fm7 | C9 | Fm7 |

-2-







아 리 랑

아 리 랑 아 리 랑 아 라 - 리 - 요 - -

아 리 랑 고 개 - 틀 - 념 어 간 다

나 - 틀 버 리 고 가 시 는 님 - 은 - -

심 리 도 못 가 - 서 - 발 병 - 난 다 -

